

名草神社（本殿及び拝殿） — 保存修理説明資料 —

名草神社は、妙見山（標高1,139m）の山中、標高800mに位置します。古くは妙見社と称して但馬地方を中心に庶民の崇敬を集めました。寛文5年（1665）に出雲大社から移築した名草神社三重塔は明治37年2月18日、本殿と拝殿は平成22年6月29日に国指定の重要文化財になりました。

本殿は、桁行^{けたゆき}17.6m、はりま^{はりま}9.0mの規模を持つ大型の社殿です。宝暦4年（1754）5月に再建されました。屋根は入母屋造で、建物の正面に3間の向拝があり、軒下を豊かな彫刻や彩色で飾ります。

拝殿は、桁行5間（11.7m）、梁間2間（5.2m）の建造物で、元禄2年（1689）に完成しました。屋根は入母屋造です。桁行5間の中央間を通路とした割拝殿という珍しい形式です。建物の周囲に縁を廻らし、南面の縁は石垣の前方に張り出して下から柱で支える懸造^{かけづくり}としています。

平成24年3月に本殿と拝殿の屋根が積もった雪の重みで破損しました。また、長年の歳月によって地盤が沈下し、柱等の軸部や軒廻りの破損も進んでいるため、本殿と拝殿の根本的な修理を計画しました。建築以来、初めての大修理です。

名草神社では、平成27年8月に本殿と拝殿の保存修理工事を開始しました。拝殿は建物の半解体修理を実施し、本殿は屋根を解体して修理しました。本殿と拝殿の彩色は調査をして建築当初に復元し、令和3年度に完了しました。また、令和2年4月から防災工事に着手し、排水施設の整備、石垣の保全修理、自動火災報知設備や消火設備の改修整備を実施し、破損から11年、工事は8年をかけて令和4年に一連の修理が完成しました。



1.江戸時代の姿を取り戻した本殿



2.修理した石垣の上の当初の彩色がよみがえった拝殿と本殿

1. 本殿の保存修理

本殿は、平成29年4月に建物全体を揚屋^{あげや}という工法で1mほど持ち上げ、側通り^{がわどお}の土台を支える基礎石や基壇の石を水平に据え直し、傷んだ柱は根継ぎ^{ねつぎ}修理をしました。その後、屋根を解体して破損した部材を取替え、小屋組の木材を組み立てました。とくに破損が著しい向拝^{むかひ}は、唐破風の垂木^{からふたるき}までを取り外し、腐朽^{こうはいげた}した向拝桁^{むかひげ}を修理しました。そして、木材を元どおりに組み立て、屋根を新しいこけら板で葺き替えました。屋根の小屋組内に積雪荷重補強のための木材を入れ、床下に耐震補強のための補強材を取り付けました。

また、彩色調査の成果にもとづいて建築当初の外部塗装を復元し、内部は外陣の漆塗を塗り直し、彫刻などの彩色は剥落止め^{はくらくど}を行いました。外部や内部外陣の飾り金具は取り外し、金箔を押して当初の状態に復元しました。約250年前に建てられた江戸時代の外観を取戻しました。



1. 揚屋工法で本殿を持ち上げる



2-1. 屋根の解体後、向拝の破損状況



2-3. 小屋組の組立状況（周囲を仮設建物で覆った中で修理）



2-2. 向拝桁の補修と縫破風の取替



3. 彫刻の彩色に剥落止を行う



2-4. 向拝の修理完成、飾り金具は当初の銅板を補修



4. 床下を補強し、格子組の耐震壁を設置

2. 拝殿の保存修理

拝殿は、平成28年6月に建物を曳家によって本殿側に約10m移動させ、拝殿の正面にある破損した石垣を修理しました。建物が不同沈下していたことから、その対策として、地中に最大で深度約22mまで鋼管杭を打ち込み、建物を支える鉄骨架台を設置しました。

その後、建物を元の位置に戻し、屋根や小屋組を解体し、折損した柱を取替えるなど建物の修理を実施しました。解体した部材は再び従来通りの工法によって組み立て、取替えた柱などの木材はすべて同種の国産材を使用し、表面の加工や継手の仕口も従来どおりの形で行いました。また、部材の接合部などに残った塗料を調査して建築当初の塗装を復元しました。

あわせて建物の補強を行い、耐震補強として床下に耐震ダンパーを設置し、既存の板壁を補強して耐力壁としたほか、積雪対策として小屋組内に桔木を追加しました。



1. 石垣修理、石垣を解体して修理する



2-1. 拝殿下に鋼管杭を打設、最大深度22m



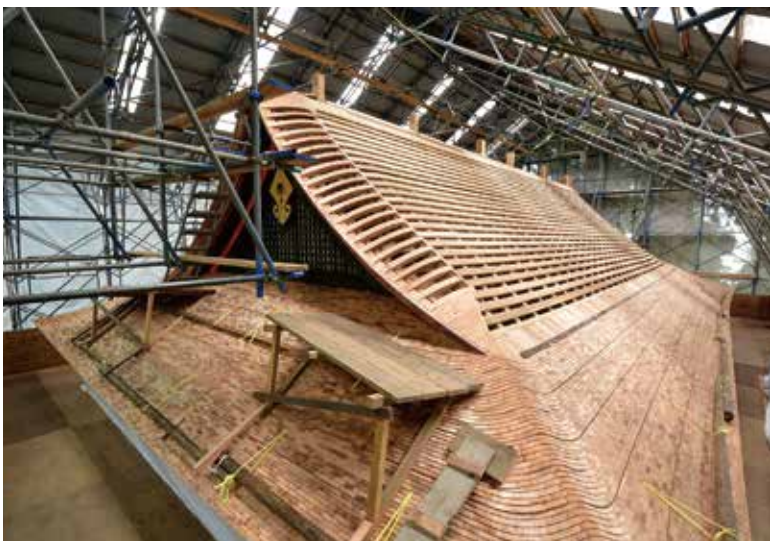
2-2. 基礎石を据直し、鉄骨架台を設置



3-2. 折損した柱を取替えて屋根の組立を開始



3-1. 屋根を取外し、半解体修理を実施



3-3. 薄い杉のこけら板で屋根を葺く（周囲を仮設建物で覆う）



4. 床下に補強材を取付けた耐震補強

3. 拝殿の発掘調査

発掘調査によって現在の拝殿の地下約40cmの位置に、古い拝殿の遺構とその時代の生活面が確認できました。

現在の拝殿は通路の両側に石で布基礎を設置して土台を置き、その上に柱を載せています。南側の土台は石垣の上面に置いています。発掘調査を進めると、現在の拝殿の前身となる布基礎をもたない礎石建物が見つかりました。大きさ50~100cm、厚さ30~45cmの礎石が10個、礎石の抜き取り跡が6個ありました。現在の拝殿より1.8m北側に古い拝殿が建っていたことが判明しました。

建物の規模や構造は現在の拝殿と同じで、柱間の間隔は一致します。このことから、現在の拝殿は当初は1.8m北側に建てられ、石垣を積んで南側（現位置）に動かしたと考えています。



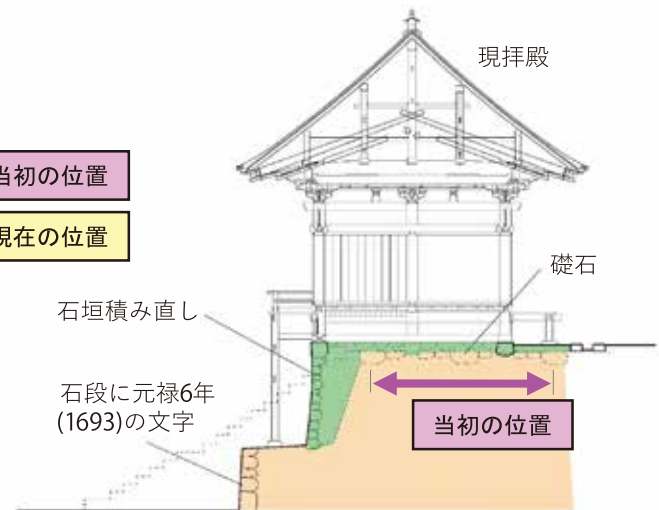
1-1.発掘で見つかった古い礎石の跡と縁石



1-2.礎石に残る柱の痕跡と墨の基準線



2.発掘調査で見つかった礎石建物



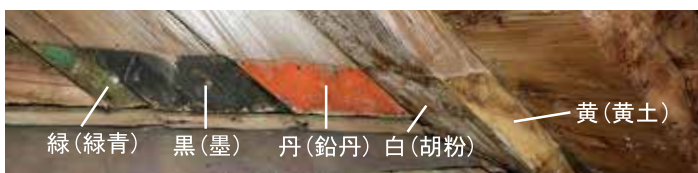
3.石垣と拝殿の位置（模式図）

4. 彩色の調査

建物の解体を進めると、部材が重なった部位や金具の下から当初の塗装が見つかりました。彩色や塗装の材料について科学的な分析調査を行い、塗装を復元しました。



1.拝殿の彩色：当初の丹塗の上に後にベンガラ塗装



3.本殿の彩色：金具の下に残る当初の妻側破風の塗装



2.本殿の化粧隅木：飾り金具の下に古い塗装が残る